

理想の保育者の資質について④

西 本 脩

これまで数回にわたって、理想の保育者の資質として重要と思われるものを挙げてきましたが、最後に、その他の条件について述べてみようと思います。

四、その他の条件

1、年齢 前に挙げたシュナイダーの「理想的教師の心身の特性」の表にもあったように、ある教育学者は、若い人をよいとしているのに対して、他の教育学者は、年いった人をよいとしています。このようなことから明らかのように、実際、よい保育者として、若い人がよいか、あるいは年いった人がよいかということ、一概にはいえないこととします。つまり、年齢は、よい保育者たるの条件としては、さほど重要なものではないといえましょう。ただ、前に「人格・性格的條件」として述べたように、精神的な若々しさは、肉体的な老若にかかわらず、保育者として非常に大切なものであると思います。幼児とともに体を動かすことが億劫な人、戸外へ出ることがいやな人等々……の年寄りじみた人では困ります。保育者は、いつも精神的な若さを保って幼児といっしょにとんだり、は

ねたりして遊べるようであればなりません。またいわゆる頭の古い人や頑固な人も困ります。もちろん、何でも新しいものにとびつくようなのがよいというのではありませんが、自分がずっと以前に習ったことが絶対に正しいとして、排他的になったり、今までやってきた自分の経験に間違いはないと、自分の腕に自信を持ち過ぎて、他人の意見に耳をかざないというようでは、世の中の進歩について行けず、一人取り残されてしまうでしょう。世の中は絶えず移りかわりつつあります。保育の世界も、他の世界と同様に。幼児もいつも成長発達しつつあるものです。したがって、保育者も肉体の年齢に関係なく、いつも世の中の進歩とともに、また幼児の成長とともに、たえず勉強し、成長をつづける精神的若さを持つていくことが必要です。

このように見えますと、年いった人は不利で、若い人がよいように思われますが、必ずしもそうはいえないようです。若い人は何といっても、保育の経験はもちろん、世の中のいろいろな経験も浅いものです。学校を卒業してすぐに幼稚園や保育所に勤務したよう

な場合、今までの学習の結果を生かそうとして、一生懸命努力するのですが、保育の経験がないために、あまりにも杓子定規に学校で習った一般論をそのまま、個々の場合に当てはめようとしています。そのときどきの状況の変化に応じた臨機応変の処置をとることがむずかしいようです。そのために、保育に対する情熱ははげしいのですが、保育の方法は拙く、一生懸命やっているわりに効果があがらないということになります。そこには矢張り経験というものが必要になってきます。熱と若さは、たしかに尊いものですが、それだけで遮二無二進もうとすると、障壁にぶつかって動きがとれなくなってしまう。はじめはだれでも経験年数〇から出発するわけですから、その新進気鋭の若さと熱とをもって、一生懸命勉強をしながら、経験豊かな先輩の保育者にいろいろと指導を受けながら保育をすることが大切でしょう。

ですから、一つの幼稚園や保育所の中には、先輩の経験年数の長い保育者と若い保育者とがともにいて、お互いに相補い合うのがよいのではないかと思います。年いった保育

者ばかりでも、また若い人ばかりでも困るのではないでしょう。そうして、この場合、年いった人も若い人もお互いに謙虚な気持ちで、たずねあい、教えあい、話し合っていて、互いに自分に欠けたところを補い合うようにして、ともに力を合せて保育に当るのがよいように思います。若い保育者と年いった保育者とがはなればなれになったり、両者の間に感情的なもつれがあつたりすると、その園の保育の効果があがらなくなってしまいます。

2、結婚 先の年齢と関連して、よく問題になるのは、保育者として未婚の人がよいが、あるいは既婚者がよいかということ。これもなかなかデリケートな問題です。一概にどちらがよいとはいえないように思います。

未婚者は、若さと熱にあふれ、家庭の雑事にあまりわずらわされないで保育の仕事に専念できる反面、自分の子どもを育てた経験がないので、子どもの発達段階を充分に理解できず、そのために子どもを非常に甘やかしたり、反対に、子どもに無理なことを要求し過

ぎたりしかねません。また子どもの扱い方が下手であるとか、世間知らずのお嬢さんであるというようなことで、親達からの信頼を得られなかったりすることもあります。

また未婚者の中でもとくによく問題にされるのは、いわゆるオールドミス(老嬢)のことです。保育の上で考えなければならぬことは、老嬢のパーソナリティー(人格)が幼児に及ぼす影響についてです。世間をよくいわれることは、老嬢は若い未婚婦人や既婚者たちがついて、性格的な円満さ、調和を欠いているということ。もちろん、すべての老嬢がみんなそうだということではありません。老嬢の中にも、まことにりっぱな円満な人からの持ち主が多くいます。けれども、比較的に見た場合は、何か片寄った、あるいは足らないところのある性格の持ち主が多いといえるかもしれません。ある人は、あたかも自分の恋人や夫や子どもでもあるかのようになり、無闇に園児をかわいがつて、甘やかしたり、世話を焼きすぎたりします。そのために、子どもに対する自立性・独立性のしつけがうまくできないような場合もあります。また、あ

る人は、非常にヒステリックになって、自分の心の中の満されないもの、イライラした気持のハケ口を園児に求めたりします。この場合は、前の場合とは逆に、非常に厳し過ぎて、叱言が多くなったり、子どもに対する抑圧が強くなり過ぎます。また、ある人は、気分がむらがあつて、機嫌のよいときには無茶苦茶に子どもを甘やかし、放任しておきながら、ちょっとまかりまちがうと、ひどく子どもに当りちらしたりするというように一貫性のない態度をとるようになります。(このよ
うなパーソナリティーは何も老嬢に限るわけではありませんが)このようなパーソナリティーの保育者が幼児に対して悪影響を及ぼすことについては、すでに「人格・性格的条
件」のところ述べてましたので省きます。

一方、既婚者は、自分の子どもを育てた経験を保育に生かすことができるので、子どもの取り扱いにも慣れており、うまく、また未婚者よりも、育児・家事その他の苦勞もしてきているために、いわゆる世間を知っています。そのため、園児の親達から信頼を受けることも多く、彼らを教育したり指導するのに

は、未婚者よりも都合がよいようです。がその反面、家庭持ちであるために、家事にわずらわされて仕事の手薄になったり、仕事と家庭を両立させるために悩むことが多かったり、肉体的・精神的に重労働になることが多
いようです。保育の仕事を十分にしながら、しかも家庭をうまく管理していくのにはいか
にすればよいか、妊娠、出産、育児などと園の仕事のいかに調和させていくかなどの問題
があります。

現在の日本の家庭の生活状態では、一般に婦人が家庭と職業とを両立させるのには、非常な困難を伴うようです。ことに勤務時間が長
く、労働のほげしい保育者の仕事と家庭の仕事とを両立させることは、なかなかむずかしいこと
です。そのために、結婚すると、保育の仕事
を辞める人が多いようです。このこと

は、幼稚園や保育所への就職希望者にとつては、
ありがたいことかもしれません、広く我が国の
保育界の進歩発展という点から見ると、マイ
ナスになっているように思います。学校を卒
業して、熱と若さをもって就職し、最初の一
年間は無我夢中で先輩の保育者の導

きにしたがって過し、二年、三年とたつに
したがって、大分慣れてきて、いよいよこれ
から、本格的に自分の身についた保育をし得
ると思われる頃になると、結婚のために辞め
なければならなりません。その後任には、ま
た新卒の人が前任者と同じことを始めから
繰り返す。こういったふうで、幼稚園や保
育所の保育があまり進歩しない原因の一つは、
い
つも新米の保育者が多いということでしょう。
う。せっかく慣れて、これからというときに
なると辞めて、また新米の人に代る……こ
ういうことを繰り返している間は、なかなか
展し難いでしょう。こういったことを解消す
るためには、結婚後もずつとつづけて、保
育者としての仕事をしていけるように、家庭
生活の合理化をはかり、家族の理解・協力を
得て幼稚園・保育所の仕事を合理化し、保
育者相互間の理解・協力が必要でしょう。

以上いろいろなことを述べましたが、要す
るに、若い未婚者でも、老嬢でも、既婚者
でもよいわけで、このようなことは、よい保
育者の条件としては問題になりません。大切
なのは、やはり、一人ひとりのパーソナリ
ティ

1です。一つの園の中では、既婚者と未婚者がともにいて、お互いに欠けたところを補い合うことが望ましく、この場合に、お互いに相手の立場を理解し、尊重して、協力し合うことが大切です。

3、家庭 私たちのパーソナリティーに対する家庭の影響は非常に強いものがあります。家庭内にトラブルや問題がありますと、その人のパーソナリティーにも歪みを生じてくることが多いものです。本当に円満な人格の持ち主は、暖かいよい家庭に多いものです。したがって、よい保育者はまた、よい家庭人である必要があると思います。よい家庭というのは、お金がある、経済的に裕福ということではありません。いくら経済的に恵まれていても、家族の間がしっくりしなかったり、冷い人間関係にあるのではよい家庭といえません。せまいながらも楽しい我が家といわれるような暖い家族関係、人間関係にもとづいた家庭がよい家庭です。よい保育者は、家庭においては、よい娘であり、よい妻であり、よい母であり、よい姉でなければなりません。父親や母親といつものいいあらし

ったり、心配をかけるような親不孝娘、夫との和合をはからないで、我が道をいくというような妻らしくない妻、我を通すために離婚までする妻、我が子を他人に預けっぱなしでほとんどかえり見ないような母らしくない母では、本当によい保育者にはなりにくいと思います。外から見た場合、一応仕事はできるやうでも、こういう人には、きつとパーソナリティーの歪みがあると思われるからです。たびたびいいましたように、よい保育者として、もっとも大切な条件は、円満な調和のとれたパーソナリティーを持つていること、いかにえれば精神的に健康な人であることです。

以上、理想の保育者の資質について、いろいろと考えてきましたが、最後に参考までに東京都で規定されている教員適性検査のうち、身体検査で不合格となる基準を挙げておきます。

- 1、身長 一五〇センチ未満の者
- 2、栄養 著しく障害されている者
- 3、視力 両眼で矯正視力〇・七に満たない者

4、色神 異常ある者

5、眼疾 トラホーム、その他伝染性眼炎ある者および高度の斜視

6、聴力 難聴ある者(3/6)

7、精神機能 障害ある者

8、循環器 心臓の器質的疾患のある者

9、せき柱、胸廓 著しい異常のある者

10、言語 吃音および発音障害のある者

11、運動機能 著しい障害のある者

12、結核性疾患 (既往症のある者 (ロ) 打診聴診で所見のある者 (イ) レントゲン検査で所見のある者 (ウ) かくたん検査で菌陽性の者 (カ) 赤血球沈降速度異常速進の者 (ク) 人工気胸中の者

13、その他伝染性疾患のある者

14、容姿外見著しく異常なる者

(筆者は大阪樟蔭女子大学助教授)

幼児の教育内容と

その指導

お茶の水女子大学附属幼稚園
幼児教育研究会編

二二〇円 下 三二二円

フレイベル館発行……